私の健康法

日本薬剤師会会長
山本信夫さん

足がつった時に芍薬甘草湯

「以前は週に一度ほどスポーツジムに通っていましたが、最近は行けなくなりましたね」

●25代会長として

新型コロナウイルスが文字通り猛威を振るい、世界中が戦後最大の危機に直面しているといわれる今、医療関係者への敬意と感謝がかつてなく数多く寄せられている。

その一員として欠かせない薬剤師の職能団体である日本薬剤師会の歴史は、1893（明治26）年に遡り、爾来127年を経ている。初代会長の正親町実正（おおぎまちさねまさ）から数えて25代会長に就任したのは2014（平成26）年、今春の臨時総会で開局薬剤師として初めて４選され、この100年に一度の危局に約10万人会員のトップとして陣頭に立っている。

●老舗薬局の三代目

戦後から5年を経た1950（昭和25）年、東京大学にほど近い文京区で呱々（ここ）の声を挙げた。生家は薬局だった。

「祖父の代からの薬局でした。そんなことから自ずと薬大に入りました」

東京薬科大学では、学業の傍ら高校時代と同様に写真部で青春を謳歌した。研究者になるつもりだったが、卒業後は本邦初の調剤薬局を創った水野睦郎氏の下で調剤のイロハを習い、1981年に保生堂薬局の三代目として後を継いだ。家業の傍ら1994年に日本薬剤師会の理事に就任、以後、常務理事、副会長を経て今日に至っている。

●甘いものが好き

子供の頃は近所でも評判のいたずら小僧で、食べ物の好き嫌いもあったそうだが、間もなく古稀を迎える現在は、「どうしてもパクチだけは食べられませんが、たいてい食べられるようになりました。小さい時は肉が嫌いで、そのにおいが苦手でした」

寿司や蕎麦など和食を好み、甘いものには目がない。「木村屋のアンパンが死ぬほど好きですね。これはどうも父親譲りのようです（笑）」

国際薬剤師・薬学連合の副会長に就任してからは、それまで飲めなかったというよりもあまり飲む機会がなかった酒も、付き合いの関係からそこそこ飲むようになり、程よい潤滑油にしている。

特段の健康法や養生法はないそうだが、60歳になってからは定期的に人間ドックに入り、健康診断を欠かさない。2011年の東日本大震災の後、一時、体調を崩した時があったものの、その後は特に大過なく過ごされている。

「漢方はあまり勉強しませんでしたので、東大の前で漢方薬局を開局している学生時代の同級生を頼りにしています。足がつった時に飲んでいるのが芍薬甘草湯です」

プロフィール

1950（昭和25）年7月3日生まれ、東京都出身。1973年3月、東京薬科大学卒業、1981年4月、㈱保生堂薬局入局、1994（平成6）年、日本薬剤師会理事、2005年厚生労働省 中央社会保険医療協議会委員、2013年、東京都薬剤師会会長、2014年、日本薬剤師会会長、厚生労働省医道審議会委員、国際薬剤師・薬学連合（FIP）副会長、内閣府社会保障制度改革推進会議専門委員、2015年、内閣府次世代医療ICT基盤協議会構成員。2016年3月、薬学博士（昭和大学薬学部）